OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ズュースミルヒ『神の秩序』と人口の統治
Author(s)	紫垣, 聡
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2022, 56, p. 29-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94859
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ズュースミルヒ『神の秩序』と人口の統治

紫垣　聡

キーワード：ズュースミルヒ／人口／官房学

はじめに

M・フーコーは、18 世紀に人口が権力の諸技術の相関物として構成されるようになったという。ある国や都市に住む人間の総体としての人口は、以前から意識されていた。課税のための人口調査が行われ、重商主義のテクストでは人口は国力の基盤、源泉とされた。18 世紀には人口の見方、扱い方が変わり、人口は単なる臣民の集合ではなく、あるプロセスの集合とみなされるようになる。人が生まれ、子を産み、死ぬといった本性的な現象として現れるプロセスに、計算や分析によって働きかけ管理する人工的な技術が、統治の枠内で発展した[1)]。

この人口の統治に不可欠であったのが、人口統計の知識と技術である。17 世紀後半のイギリスでその手法は編み出されたが、当初は国力の比較や年金保険の算定に利用されるものだった[2)]。18 世紀半ば以降、人口は統治の諸原理や諸目的と結びつけて語られ、統計的に得られた知見から人口政策が論じられるようになる。人口を自然の現れあるいはふるまいとして理解する新しい思考と言説は、自然の秩序に即した統治こそが「良き統治」であるとする認識を促した。

筆者の問題関心は、「人口の発見」を通して 18 世紀における知と統治の関係の変容を明らかにすることである。本稿ではプロイセン王国の牧師、神学者ヨハン・ペーター・ズュースミルヒ（Johann Peter Süßmilch, 1707-1767）

の人口思想と、18 世紀半ばの統治をめぐる議論の関係に注目したい。彼は1741 年に発表した『神の秩序』と題した著書において、人間の出生、結婚、死亡には一定の法則性があることを明らかにし、これを神の司る摂理として示した[3]。本書は人口学史における古典として評価されてきたが、同時代の政治経済、あるいは統治全般をめぐる議論にどのような影響を与えたのか、また、ズュースミルヒ自身が政治的問題への関心を強めていき、1761-62 年に出版した『神の秩序』改訂版において人口政策を展開するに至る状況は十分に説明されていない。

ズュースミルヒの人口思想の根幹には、豊富な人口は国家の力、臣民の幸福の源であるとする近世の政治経済論に伝統的な見方があり、そのため典型的な重商主義者ないし官房学者とみなされてきた[4]。しかし近年のポリティカル・エコノミー研究の状況を鑑みれば、こうした評価はステレオタイプとして批判されるべきだ。アダム・スミスによって克服されるべき経済思想、政策としてひとくくりにされた「重商主義」は実際には多様な、しばしば相矛盾する言説であり、なかにはスミス経済学の先駆となるアイデアや理論も少なくない。また近世ヨーロッパにおいて経済は、道徳や統治と切り離されて論じられるものではなく、ケネーやスミスも「レッセフェール」をあるべき秩序の枠内で捉えていた。さらに、従来のポリティカル・エコノミー研究が英・仏語圏のテクストに偏っていたことへの批判から、国際的な視点での研究がさかんとなっている[5]。

こうした状況において近年注目を集めているのが官房学（Kameralismus/Cameralism）である。これは近世のドイツ諸侯国家において発達した、君主財政の富殖や国力増強のための政策論、統治の指針、行政組織と実務についての手引きなどを含むいわば国政術であり、しばしば「ドイツ版重商主義」とみなされてきた[6]。1727 年にプロイセンのハレ大学とフランクフルト・アン・デア・オーデル大学に「オエコノミー、ポリツァイ、財政学（Oeconomie, Policey und Kammer-Sachen）」の講座が設置されたことで、官房学は国家の行財政を担う官僚を養成するための学知としても発展してい

く。[7] 従来の研究において官房学は、啓蒙専制君主を支える統治の学として、英仏の経済学とは異なる道をたどるものとされてきたが、近年はこうしたパターンは相対化され、国際的な関連のなかで官房学の知と言説を捉えなおす試みが行われている。[8]

人口の統治に関する研究はドイツ語圏においてあまり豊富とはいえないが、近年になって注目すべき成果も現れている。J・ニッパーダイによる近世ドイツにおける人口論の系譜を丹念に跡づけた研究[9]や、18世紀後半のドイツ、フランスにおける統計の政治的利用を分析したL・ベーリッシュの研究[10]は、この問題に関して新たな議論の土台を固めつつ方向性をも示したもので、今後の研究の発展に大きく貢献するだろう。本稿はこうした近年の成果に拠りつつ、ズュースミルヒの人口論を醸成した18世紀半ばの統治をめぐる議論の新たな潮流と思考様式を明らかにする。それによって人口の統治を、ステレオタイプな重商主義や官房学の議論を超えて、近世のポリティカル・エコノミーを問い直す切り口としたい。

1. 人口の法則性を求めて——『神の秩序』初版（1741年）の人口論

ヨハン・ペーター・ズュースミルヒは1707年、ベルリン近郊のツェーレンドルフに生まれた。父親は皮革工であったが、彼は勉学の才を認められてハレ大学、ついでイエナ大学で神学、医学、法学を修めた。[11] このときウィリアム・デラムの『自然神学』に触れたことが、後に『神の秩序』の執筆につながったようだ。[12] 学位取得[13]後はある将官の家で家庭教師をする傍ら、人口の変動に関する研究に着手した。オランダへの調査旅行を終えた1736年、ズュースミルヒはカルクシュタイン連隊の従軍牧師となる。やがて第一次シュレジエン戦争（1740-42年）に任務として参加するが、従軍前に『神の秩序』の原稿はほとんど完成しており、1741年ベルリンで出版された。

ではこの『神の秩序』初版の内容とその特徴を確認しておこう。冒頭の国王への献辞と当時ヨーロッパ中で名声を博したクリスティアン・ヴォルフに

よる序言の後に、著者自身の序言が続く。そのなかでズュースミルヒは、神学者である自身がなぜこのような研究を行うのかについて説明している。本書の目的は「人間の出生、死亡、存続における否定しがたい秩序から、われらが慈悲深く聡明なる神の隠されたる統治をより明確に知り、それによってわれわれを父なる神の御配慮への崇敬とそれより生じたる義務の遂行へと至らしめることである」[14]。人間は一見したところ、男も女もばらばらに生まれ、また年齢においてばらばらに死ぬ。しかしより正確に観察してみると、それは一定の比率に従っており、それこそが人類への配慮を示す神の摂理である。このことから、神の理性ある被造物としての人間が自らの幸福のために行う行為にも、神の御配慮は向けられている。そのような神の真理は、人間（人口）の諸変動における秩序を通して適切に説明することができる、と。[15]

さらにズュースミルヒは聖書の記述に関しても、「自然の書物」を通して、すなわち人口動態の観察と分析によって有用な知識を得ることができ、真の信仰に近づくことができるという。こうした態度は神学者としての立場だけによるものではない。近世を通じて自然に関する著述、研究は、神が創造した世界の真理を探究するという問題とつながっていて、「無神論」と攻撃されるような書物も含めて、キリスト教の世界観から完全に自由なものなどなかった。それでもズュースミルヒは、従来行われてきた人口推計が政治的、経済的分析に利用されていたことに対して、自身の研究の独自性を強調している。政治算術の祖とされるジョン・グラント（John Graunt, 1620-1674）やウィリアム・ペティ（William Petty, 1623-1687）が作成した死亡表や分析手法を高く評価し、エドモンド・ハレー（Edmond Halley, 1656-1742）やニコラス・ストライク（Nicolas Struyck, 1687-1769）が終身年金に利用するため生残者を計算したことの意義を認めてもいるが、ズュースミルヒは本書の目的はそこにはないという。当時の彼にとって重要なのは、人口推計にもとづく国力比較や金融商品といった個別具体的な問題ではなく、人間の生死と人口の変動における普遍の法則、「神の秩序」を明らかにすることであった。

このような人口へのアプローチは、それまでの人口論とはおおきく異なっ

ている。人口を数え論じるのは、たとえば納税者や徴兵可能な人間を算出したり、国力の源泉として位置づけるといった、政治や社会に関する著作において行われるものだった。あるいは、アダムとイヴから人間がどのように増えていったのか、古代ローマにどれほどの人口があったのかといった議論もあったが、数量データにもとづかない臆見にとどまっていた。これらに対し、ズュースミルヒは人口そのもののふるまいを考察の対象とし、可能な限り多くの資料を集め、さまざまな集団の人口変動の傾向を数量的に把握してそこに規則性を見出した。彼が「人口統計学の父」と呼ばれるのは、本書で示された人口秩序と定量分析により「科学的」な人口論の確立におおきく寄与したと認められているためである。

数量データの利用は、本書の記述的な特徴として表れている。第1章ではプロイセン王国および各地の死亡者数・出生者数の資料をもとに、出生者がつねに死亡者より多く、したがって人間は不断に増殖することが示される。それは、たとえばプロイセンにおいては「1699年および1700年の両年の死亡者の、1723年および1724年のそれに対する比率は46015対54711、すなわち1対1$\frac{9}{50}$であり、それはほぼ1対1$\frac{1}{5}$となる」[16]といったように、多くの具体的な数、比、計算によって説明されている。同様に死亡者対出生者の比率が一定の範囲におさまること（第1章）、1婚姻当たりの出生率（第4章）、出生者における男女比（第5章）、年齢別の死亡率（第6章）、疾病別死亡者数（第7章）などの推計に関しても、大量のデータをしてそこに隠された秩序を語らせるかのようである。[17]

これらの推計はいうまでもなく、常に同じ値になるわけではない。死亡者に対する出生者の比率は、東プロイセンでは10対16であるのがドイツ西部クレーフェ公領では10対12であり、また大都市においては出生者の比率が小さく、しばしば（とくに17世紀において）死亡者数が出生者数を上回ることが確認される。[18] 婚姻当たり出生率についても東プロイセンが約4.5（人）であるのに対しヴェストファーレンでは約3.5と推計される。[19] そのような差異や変動の背景にある社会的要因に関しては、人口そのものに対する観察か

ら独自の見解を導いている。人間の増殖を妨げるもの（第2章）として従来論じられてきた黒死病（Pest）や戦争、飢饉に加えて、ズュースミルヒは多数の人びとの無配偶状態を挙げた。結婚適齢期において男女の数はほぼ同数となる[20]ため、人びとを結婚から遠ざけるようなカトリック信仰（聖職者妻帯の禁止）、多妻制、重税などが、人口増殖を抑制する障害とみなされる。[21]

また婚姻当たり出生率の差異について、地理的環境や民族の性質よりも、女性の婚期を主要な要因と指摘している点も注目すべきである。ズュースミルヒは人間の生殖能力や出産可能時期におよそ共通の限界があるとしたうえで、結婚、出生、死亡の数に一定の相関関係があるという分析結果から上記の要因を見いだしたのであった。[22]人口の変動に一定の法則性があるのであれば、結婚、出生、死亡といった変数における差異もまたその法則性から説明されうる、というのがズュースミルヒの示した人口秩序であり、そこからは各変数への働きかけを通して人口を操作することができるという推論が導かれる。

しかしそのために何をなすべきかといった点について、彼自身は具体的な議論を避けている。たとえば人口増加の障害として無配偶状態を挙げ、出生率の差異が女性の婚期によることを示し、私通が国家全般に与える害を説きながら、結婚をどのように促進するかについては、ハレーの議論を簡単に紹介するのみである。[23]現実の政治や社会に対する提言の類は、皆無ではないものの数少ない。しかもそれらは、都市において死亡率が高いのはその生活様式と結びついた悪徳が不健康を引き起こすためであるとか、死亡者のうち最多を占める子どもの病気には母親の悪習に原因があるといった、当時の一般論の域を出ないものも多く、現実的な施策の提案とはいえない。[24]私通の害について強調する一方で、出生者の分析においては私生児の数は全体からすればわずかなのでその影響を考慮せずとも差し支えないと述べており、質的な観察と量的な観察が整理されないままに並べられていることも、一般的規則の実践的応用における問題点として挙げられよう。

とはいえそれはズュースミルヒにとっては重要な問題ではないのかもしれない。彼は人口を司る摂理を明らかにし、またそれが「産めよ、殖えよ、地に満ちよ」という神の命令を果たすために貢献しうるという一般的効用を示すことが自身の仕事であり、個別の施策を考え実践するのは政治の仕事だと考えていたことだろう。子どもの頃から自然哲学に親しんだ神学者であり、デラムの『自然神学』に格別の刺激を受けたズュースミルヒにとって、現実の問題に関わることに消極的になるのは無理からぬことだったのではないか。実際、人口を政治経済的な意味と効用において論じるドイツ語文献は少なからずあったにもかかわらず、彼はそれらをまったく引用していない。この時にはほとんど知りさえもしなかっただろう。それらのテクストにおいて人口は国家の富を生み出す源泉として語られるばかりで、普遍的な人口秩序を見いだそうとする彼の自然神学的な知的関心にとって必要な情報は含まれていなかった。[25)]

『神の秩序』初版に特有の視点、方法、目的が根差していたのはしたがって、ドイツではなくイングランドの知的伝統であった。直接的な影響としてはデラムのインパクトが大きかっただろうが、より広く見れば王立協会フェローに共有される実験哲学の理念に支えられていた。それは、観察された事実にもとづいて知識を生産することであり、人口動態のように実験による再現ができない場合には、数値による定量化が得られた知識の確からしさを担保した。数は万人にとって共通の尺度であり、その増減や連続性からは現象を経験的に把握し説明することができ、また一見したところ関係のない数値に一定の関係や恒常性があれば、それは天体の運行のように創造主の偉大なる摂理を示す手段となった。[26)]

ズュースミルヒの研究の方法的なモデルとなったのは、グラントやペティ、グレゴリ・キング（Gregory King, 1648-1712）らによって行われた人口資料にもとづく国力推計、すなわち政治算術である。人口推計の手法についてはグラントにおいてすでに完成しており、彼は『死亡表に関する自然的および政治的諸観察』（1662 年）において、ロンドンの各教区の毎週の受洗

者（これを出生者とみる）数と死亡者数を記録した一覧表を作成し、それをもとに社会分析を行った。ペティやキングはこれを、人口から一国の収入を推計し、他国のそれと比較する方法へと発展させたのである。[27] ズュースミルヒの研究は政治経済的な分析を主目的とするものではなかったため、『神の秩序』第 8 章で現在の人口を推計するための死亡表の利用について考察しているが、国力算定への利用は短く紹介する程度だった。[28] このときのズュースミルヒは分析手法においては政治算術家だったが、その関心はもっぱら人口という自然のふるまいに向けられていた。

ズュースミルヒは人口の動きに一定の規則性を見いだしたことだけでなく、そのために彼が取った、数表に示された事実の観察と厳密な計算という「科学的手続き」によって「人口統計学の父」として評価されている。そのためしばしば近代人口（統計）学の先駆としての業績ばかりが注目され、1741 年の『神の秩序』以後の著述において、とりわけ初版から 20 年を経て発表された改訂版において展開された人口政策的な議論はあまり関心を集めてこなかった。次節ではこの改訂版の内容と、初版からの変化の背景にあったものについて論じる。

2. ズュースミルヒの人口政策——新版『神の秩序』（1761/62 年）とその背景

1741 年に公にされたズュースミルヒの『神の秩序』は相当な好評を博したらしく、翌年には著者本人の許諾を得ていないいわば海賊版が出版されている。ズュースミルヒ自身も、1745 年にベルリンの王立科学アカデミーに招聘され、そこで研究成果を発表する機会を得た。[29] どうやら彼はこのときすでに、人口秩序を政策的に応用する考えを披露していたと思われる。ズュースミルヒの講演はアカデミー会員の注目を集め、1749 年にアカデミーの会長を務めていたモーペルテュイ（Pierre-Louis Moreau de Maupertuis, 1698-1759）の推薦を受けて、フリードリヒ大王に王国の人口問題を解決する計画を書き記した手紙を送った。そのなかで自身の人口学的知見をもと

に出生力を高めるには若い夫婦を増やすことが肝要と述べ、人口が減少している地域に結婚すべき多くの若い男女を移住させるよう説いた。しかしこの申し出に対する国王の返答は、そのような事業はいち聖職者の手に負えるものではなく、政府の専門部局に委ねるのがよいという取りつく島もないものだった。[30] 宮廷に出仕する道は断たれ、結局ズュースミルヒは 1742 年に任命されたベルリン－ケルン地区の聖ペトリ教会で教区長として、また宗務局顧問および救貧委員の職を長らく務めることになる。[31]

上のフリードリヒ大王への手紙の件からもわかるように、1740-50 年代にズュースミルヒは神学的関心のみならず、政治的、社会的関心からも自身の人口学研究の意味を考えるようになっていた。そして 1761-62 年に主著『神の秩序』を大幅に改訂した新版を出版した。[32] 本文頁数は初版の全 9 章 360 頁から新版は 2 巻本で全 25 章、序章と補遺も含めると計 1155 頁へと 3 倍増し、巻末資料の数表は初版の 18 から改訂版では 74 と、こちらも大幅に増えている。分量だけでなく、内容についても大きな変化がみられる。すなわち、自身の人口学的知見を現実のさまざまな問題の解決に応用する、人口政策の提言を明確に論じているのである。初版では慎重に避けていた政治的問題を考察することについてズュースミルヒは、序文（Vorrede）においてつぎのように弁明している。「神の叡智たる秩序の観察と不可分に結びついている真理を隠さず述べることは私の罪だろうか。真の政治と統治の知恵を創造主の基本原則（中略）から導き出し、この理に背く者には決して世を幸福に治めることはできないと示すことは、ひとりの神学者には似つかわしくないことだろうか」。[33]

国家統治への関心がはっきり表れるのは第 10 章以降で、第 1 ～ 9 章では基本的に初版のスタイルを踏襲している。死亡者と出生者の比率、結婚と出生者数の関係、人口が倍加する速度、人口の増殖の障害など 20 年前から論じられていた諸項目について、より充実した統計データを用いて人口変動の規則性をあらためて証明する。しかして第 10 章の冒頭に至り、「統治者はその能力と労力のすべてを傾けて自らの臣民を幸福にし、軍隊を維持して彼らを

敵の攻撃から守り、彼らの生計手段と必需品を欠かすことのないよう義務づけられている」[34]とズュースミルヒは言明する。そして人口こそがその目的のために神に与えられまた命ぜられた手段なのだと。食糧に応じた適切な数の臣民が、幸福と力と安全と富の基礎にあるのだから、統治者は人口に関する知識にもとづき臣民の数が適当となるよう配慮しなければならない。このために重要な4つの原則が、(1) 結婚の障害となるものを取り除くこと、(2) 出産の障害となるものを取り除き、夫婦を子どもの養育へと促すこと、(3) 人びとの生命と健康を維持すべきこと、(4) 人びとの流出を防ぎ流入を促すことであり、[35]続く各章でそれぞれについて詳述される。

第一の原則、結婚の障害を除くことについては、戦争や疫病の防止のほか、農民への土地の分配や負担の減免、相続法の改正、単身者の経済支援といった制度面から奢侈や売春の規制といった風紀の問題まで、さまざまな観点から施策を提案している（第 11 章)。続く第二の原則、出産の障害を除くことでは、助産師学校の設立、多くの子どもを持つ親への援助、年齢差のある結婚や乳母利用の規制などが挙げられる（第 12 章)。第三原則である生命維持に関して、著者はいくつかの具体的な事例から国家の働きかけがあれば救われたはずの命が多く失われてきたと嘆き、医療提供体制や感染予防策の拡充を訴える。また天然痘を予防する人痘接種の公費提供や飢饉のさいの食糧支援を主張するほか、ロンドンの死亡表をもとにさまざまの死因について言及している（第 13 章)。最後の原則に関して、ズュースミルヒは臣民の国外移住を禁止するような措置は必要ないという。それよりも国内に生業と生活資源が豊富にあり、自由権と財産権が保障されていれば、おのずと人びとは自国にとどまり、外からも人がやってくる。加えて公正な司法、信仰の自由、社会の良俗、学問と教育の振興などが人口保持に必要とされる（第 14 章)。

これらに続いてズュースミルヒは、国家の経済・産業政策へと論を進める。国家の豊かさと安全と幸福の基礎となる豊富な人口を達成するには、人びとに生業と生活資源を与える農業の発展こそが肝要であると説く。そのさ

いモデルとなったのが、共和政ローマの土地制度と農法であった。ローマははじめ弱小の都市だったが、耕地の分配によって多くの壮健な市民を生み、強大な国家へと成長した。[36] ズュースミルヒはこれに倣い、国家がすべての耕地をその生産力に応じて農民に分配すれば、結婚の促進や生産性の向上につながり人口を増やすことができると述べた。さらにこの議論を進めて、賦役などの封建的義務の廃止にまで言及している点[37]は、人口の統治と社会構造の改革との関連を示唆していて興味深い。

工業もまた国家経済に重要であるとして1章をあてている。著者は繊維工場で雇用する労働者の数とその賃金、この産業がもたらす間接的な経済・財政効果を推計することで、その利益を政治算術的に示した。[38] しかし一方で工場はしばしば農業から労働力を奪い、また景気変動により業績が悪化するリスクもあるため、国家は工業よりも農業を優先すべきだという。工業は国家に富をもたらすが、労働者たちは低賃金のために自らを豊かにすることができない。また彼らは不景気や物価高騰、疫病流行のさいには最も被害を受けやすく、国家による配慮が必要とされる。[39] 重商主義の古典的な理論では製造業の拡大と輸出の増加が国を豊かにすると定式化されているが、輸出産業の利益に目を奪われ労働者を犠牲にすることは国を貧しくすることになると、ズュースミルヒは人口学の視点から示したのである。

ついで人口にとってキリスト教は不利であるとの、また多数の小さな共和国に分かれているほうが人口に有利であるとのモンテスキューの議論を反駁する。その後は初版にもみられた世界の現住人口の推計（第20章）、出生者における男女比（第21章）、年齢別死亡率（第22章）、各種年金（第23章）、疾病別死亡者数（第24章）などの人口学的な議論に戻る。

『神の秩序』改訂新版の全体を概観したとき、新しい論点として目にとまるのは、統治者による人口変動のプロセスへの介入の可能性と、人口学的視点からみた経済、産業政策の提案である。かつては神の摂理を解き明かすことに専心していた自然神学者をして、現実の政治的問題へと目を向けさせたものは何だったのか。直接的には、著者自身も述懐するように、個人的経験

による関心の変化が大きかっただろう。先述した国王の政治顧問への就任計画は失敗に終わったものの、人口学的知見にもとづく政治経済論を発表するきっかけになったかもしれない。[40] 王立科学アカデミーへの入会と多くの学者、フィロゾーフとの交流もまた、18 世紀半ばの言論界で注目されていた諸テーマへと彼を誘っただろう。

そうした関心の変化は、1752 年に発表された論文にすでに表れていた。[41] これは当時のベルリンの急速な成長と変化を人口学的に観察したものだが、そのなかでズュースミルヒは死亡率の上昇に気づき、その原因について考察を加えている。[42] それは都市に勃興している繊維工場に雇われた労働者の増加と、彼らの貧困および劣悪な環境にあると結論づけた。彼らの賃金は低く、病気になっても適切な医療を受けられないまま死んでしまう。そのような労働者の増加が都市の死亡率を押し上げているというのだ。[43] ベルリンの教区長にして救貧委員会の一員としての活動と経験は、こうした現実の諸問題への彼の関心を高めた。さらに加えて、人口の動きから成立しつつある産業社会の問題点を把握したことは、人口統計の政治的問題への応用の可能性を気づかせるに十分なものだっただろう。このアプローチは当時、ヨーロッパ全体で見ても新しいものだった。

1757 年のベルリンにおける死亡者の増加に関する考察 [44] はズュースミルヒにとって、人口統計が社会分析に有用であることを再び証明する機会となった。この年は強力な伝染病が都市全体を襲ったのではなく、例年みられるありふれた疾病――熱病や天然痘、小児けいれんなど――が、都市の周縁部に多く住む織工などの工場労働者とその家族に、例年より大きな被害を与えたのだった。[45] ではなぜこの年にかぎって多くの民衆が死に至ったのか、その原因をズュースミルヒは社会状況、すなわち物価の高騰に見出した。1756 年からこの年にかけての不作――その要因には七年戦争や悪天候が挙げられる――による食料品や生活必需品の価格上昇が、貧しい労働者たちの生活環境を悪化させた。物価が上がっても賃金の上がらない彼らは食うに困り、低栄養状態がまん延したことが疾病による死亡率を押し上げたこと

を、ズュースミルヒは統計データをもとに前回よりも詳細に説明した。[46)]

職務上の経験を通して社会状況への問題意識を高めたことと、実践的な研究の成果から自身の人口統計という手法が政治的、社会的状況の診断と改善に役立つとの手応えを強めたことが、ズュースミルヒを人口理論の再構築へと後押ししたのだろう。実際、新版『神の秩序』での経済・産業政策への提言のなかでもたびたびこれらの経験や洞察に言及し、[47)] またそれらを発展させた議論を展開している。他方で個人的な経験とは異なる面において、18世紀半ばのドイツおよびヨーロッパにおける言論、思想状況もまた、ズュースミルヒの政治経済論への「転向」と関わっていたのではないか。次節では官房学の形成をはじめ、当時のポリティカル・エコノミーの布置において人口と統治の関係を検討する。

3. 官房学と「計る統治」

『神の秩序』初版が出版されて後にズュースミルヒが辿った個人的な学問的展開と同時期に、それと並行あるいは共鳴するように、人口に関する議論は新たな段階を迎えていた。すなわち人口政策論の発展と、それを取り入れた官房学の体系化である。この動きを代表するのがヨハン・ハインリヒ・ゴットロープ・フォン・ユスティ（Johann Heinrich Gottlob von Justi, 1717-1771）であった。彼は1750年、ウィーンのテレジアヌムに教授として招聘されそこで官房学を教えた。その後ゲッティンゲン、コペンハーゲン、ハンブルクなどを経てベルリンで1765年、プロイセン王国の鉱山局長に就任する。この間に国家の政治、経済、財政に関する著作を数多く出版し、それらを通して官房学を、君主の財政運営のための諸方策から、生産と商業、秩序、安全とを相互に結びつける諸規則およびその実践の手段としての統治の理論へと洗練させていった。[48)]

よく知られているようにユスティ以前から、17-18世紀半ばのドイツ官房学の系譜に位置づけられる政治経済論や諸侯国家の統治をめぐる議論では人

口が重視されていた。バイエルンやオーストリアの宮廷侍医や商業顧問を務め、初期官房学を代表するヨハン・ヨアヒム・ベッヒャー（Johann Joahim Becher, 1635-1682）や、フランクフルト・アン・デア・オーデル大学で最初の官房学教授となったユストゥス・クリストフ・ディトマー（Justus Christoph Dithmar, 1678-1737）らはいずれも、豊富な人口こそが国家を強大にすると考え、人口を増やすことを統治者の枢要な務めだと述べている。[49] この点はズュースミルヒやユスティも基本的に変わらない。18 世紀半ばにおける変化は、人口へのアプローチだった。

従来の人口論において人口の増加は、マニュファクチュアの振興などによって国内の生業と生活資源を増やし、国外からの移住を促すことを通して達成されると考えていた。ズュースミルヒが 1741 年に出版した『神の秩序』は、人口変動の要因に直接働きかけ、出生率を高めたり死亡率を抑制することで人口をコントロールする可能性を官房学者たちに示したのだった。ユスティはこの新奇なアイデアを、結婚に直接介入することで追求できるのではないかと考えた。ゲッティンゲンで発刊していたジャーナルに掲載した 1757 年の論文において、彼は婚姻法の適切な整備を主張している。[50]

結婚を促す法が不十分であれば、独身者のあいだに自然の法と理性に背く無秩序な生殖（婚姻外交渉）が広がるだろう。それは人倫の荒廃を招き、正規の結婚を通じた出産と子どもの養育を妨げ、国家の人口に不利益をもたらす。したがって婚姻法によって男性を結婚へと促し、貞節と良俗を広め、婚姻に関する訴訟を抑制して家庭に平穏をもたらすべきだとユスティは述べる。[51] ここで彼があるべき結婚の根拠としたのは自然法と理性だったように、1750 年代以降の人口政策では産業振興などの経済的な方策だけでなく、自然の秩序にもとづくことが重要な原則として議論されるようになる。それはまた婚姻率や平均初婚年齢といった人口変動の諸要素を、ひいては人口そのものを統治の対象とする直接的な人口政策への転換を示している。[52]

ユスティの人口政策はその後、1769 年に匿名で出版された『人間の生殖と人口に関する自然的、政治的観察』にまとめられている。本書の前半では

自然的動物としての人間の生殖について述べられ、そこから人口の増殖に適した結婚へと人びとを向かわせるための政策が後半で検討される。しかしそれはたとえば、女性は 18 歳を迎える前に結婚させ、50 歳の女性には結婚を認めるべきではないといった議論からもわかるように、結婚を単なる人口増加の道具にしてしまう側面を持っていた。[53] ユスティのこうした見方は早くから表れており、1757 年の論文でも、自然誌的な観察から女性の側に貞節と従順を求める一方、男性にはより効率的な経済活動に従事できるよう煩わしい結婚から自身を解放する自由を認めるべきだと述べる。[54]

人口動態へのユスティの関心の高さは、ズュースミルヒとのあいだにおこった論争に表れている。『神の秩序』で示された、大都市では通常よりも死亡率が高くなるという見解に対し、ユスティは 1756 年の論文で異議を唱えた。[55] 大都市には多数の賃金労働者や奉公人が働いているが、彼らの多くは常に都市を出入りしているため、死亡表のデータに反映されていないはずだ、その多くが若く壮健な彼らを算入すれば都市の死亡率はもっと低くなるはずだと。[56] これに対してズュースミルヒは公開書簡で反論し、自身の立場と考えをくり返したが、実はこの問題の争点は統計の扱いの正しさではなく、経済政策の方向性にあった。都市の製造業の振興を主張していたユスティにとって、それが都市の死亡率を押し上げ人口にとってのデメリットになっているというデータは都合の悪いものだった。[57] ここで重要なのはユスティの恣意的な立論の問題ではない。この論争が彼にとって、人口を単なる目的ではなく、経済政策や統治全般において直接働きかけることのできる対象として把握するきっかけになったことだ。実際、彼が婚姻法による人口政策を提案したのはこの翌年だった。

この論争は官房学者たちの注目を集めたことだろう。この後 18 世紀後半には、政治経済論において人口政策、とくに結婚と生命・健康維持が統治の標準的なテーマとなっていった。そこには人口そのものの捉え方にも変化がみられる。かつての官房学の言説において人口は多いほど国家は豊かになるとされ、多すぎる人口が問題になったことはなかった。しかし出生率や死亡

率が統治に関する変数として可視化され、人口が操作可能な対象として認識されたことで、適正な人口規模という意識が芽生えた。ユスティは 1757 年の論文において「民族の力というものは、今日ますますその数のみならず、その富にもとづいている。賢く治められ豊かな生活状態にある国には、もはや多すぎる住民は必要ないのである」と述べている。[58] ズュースミルヒも『神の秩序』改訂版のなかで 18 世紀前半を通してプロイセン王国各地で婚姻率が減少していることを指摘したが、実はそれは良い兆候なのだという。三十年戦争の破壊から各地の農村人口が回復し、近年に至って生活資源と人口とが均衡状態になったことを、この婚姻率の推移は示しているのだと。[59]

ズュースミルヒが示した人口秩序に刺激を受けた官房学の議論の変化と、ズュースミルヒ自身の政治経済論への接近は、互いに手を取り合って進んだ。人口を媒介として現れてきた統治の様式を、ここで「計る統治」として捉えたい。この「計る」には二重の意味がある。ひとつは文字通り「計測する」、つまり国家の状態をさまざまなデータとして把握し利用する統治の様式およびその技術である。もうひとつは確立された法則や基準に対象をあてはめることで意図した効果を得られる、あるいは結果に関わらずそのような規範に従うことが適正であると想定する統治の様式である。1750 年代にズュースミルヒが人口統計の政治的応用へと傾いていったのには、こうした思潮――彼自身もそこに棹差していた――の影響があったのではないか。

これに関してはユスティの統治論にしばしば現れる「機械としての国家」のメタファーが、有効な手がかりになるだろう。[60] この政治的隠喩を端的に表すのが、『良き統治の綱領』（1759 年）にあるつぎの表現である。「国家とは、各部分が互いに正確に結びついてひとつになった道徳的身体である。それは一個の機械であり、それが持つ力と働きを発揮するためには、歯車とゼンマイとがうまく組み合わされていなければならない」。[61] 国家を一個の身体に譬える表現は古くからあったが、機械の国家はそれとどう異なるのか。ユスティによれば、この政治的機械は自然の法則に従って動く。第一に、この機械の部品たる人間の物理的身体は、血液循環のような機械的な自然法則に

従って動く。第二に、人間の肉体と精神はともに自然法則に従属する自然の衝動に導かれて動く。第三に、精神的存在としての人間は、その従うべき自然の法則へと向かう理性の働きによって動く。[62)]

伝統的な政治的身体の表現においては、人びとはその身分や職能に応じて四肢を構成していた。その身体はすでに所与のもので、命令を与えるのが頭部（君主ないし政府）だとしても、その動因は自明ではなかった。国家機械の動因は明確に自然の法則、秩序であり、そこには君主であれ誰であれ、個人の意思は介在しない。「この身体の組み立てと一体性を損なうものは、またこの組み立てられた身体の働きに役立たない余剰の部品は、容認してはならない」。[63)] 自然法則と理性にもとづき全体の福祉を追求するユスティの国家機械には、個人の福祉を顧みない功利主義的な視点が強く表れている。

ズュースミルヒの言葉にも、国家機械の表現が少ないながらもみられる。「それ（国家）は多くのゼンマイと歯車から組み立てられた巨大な機械に似ている。しかし統治される者が自らを徳によって治めなければ、その機械は正常に作動しえない」。[64)] ユスティほどに練り上げられてはいないが、ここにもひとりひとりの意思と力を束ねる「道徳的身体」としての国家という観念が読み取れる。そしてこの「徳」もまた、自然の理から生まれ導かれるものでなくてはならなかった。18 世紀半ば以降の統治論は、自然の法則、秩序をその綱領および政策の根拠とし、理性の働きによってこの法則性を理解し適正な施策を取ることで人口を増やし、国家の富と力を高め、臣民の幸福という共通善へと至ると説いた。「機械としての国家」とは、理性の力で政治体を精密かつ的確に統御することの比喩表現であった。

理性の、あるいは理性的動物としての人間の万能性への信頼は、啓蒙主義の特徴だった。『神の秩序』新版の序章（Einleitung）には、ズュースミルヒがこの時代の空気に染まっていったことが反映されている。まず冒頭に挙げられた神の言葉「産めよ、殖えよ、地に満ちよ、地を従わせまた治めよ」（創世記 1:28）から、4 つの一般的法則を導き出す。すなわち（1）子をなすことは人間の義務であり、結婚・出産を妨げるあらゆることが禁じられる。

(2) ただ生殖するだけではなく人口が増えなければならない、したがって死亡率と出生率のあいだには一定の秩序がある。(3) 地上のあらゆる場所に人間は進出すべきであり、(4) 人間は世界の支配者としての地位とそれに必要な手段と能力を与えられている。[65] 続いて彼は述べる。

> 創造主のこの熟考に値する語から明らかなるは、主の叡智と善とは天地創造の決意のさいに理性ある人間をして全地球の支配者にして居住者にすべしとの意図のあったことである。また経験から確かなるように、出生力と死亡の法則とによって人間が増殖するようにとの摂理のもとに主はすべてを置かれている。しかして世界は徐々に、またあらゆる所で人間に満たされ、そして人間は至る所を支配しまたあらゆる動物を従わせ利用する。我々はまさに神の啓示と理性と経験とが完全に一致することをここに見いだすのである。[66]

ここには神の意図、命令が強調されてはいるが、引用の最後にあるように、理性と経験とがそれに並んでいる。人間がその数を絶えず増やし、あまねく世界へ広がっていくことの動機には神がいるとしても、それが遂行されるのは理性の無限の可能性によってであるとの確信があっただろう。それは純朴な神学者よりも、啓蒙のフィロゾーフにふさわしい態度といえる。

実際、『神の秩序』新版には、モンテスキューをはじめフランスの思想家、またキケロやプリニウスといった古代ローマの著述家が頻繁に引用されている。前節で述べた、国家の富の源泉は農業にあるとする視点は、フィジオクラシー（重農主義）の政治経済論に重なる。それは具体的な政策の領域に限られない。ケネーが自ら称した「フィジオクラシー」はギリシア語で「自然の秩序による統治」を意味する造語だが、それはズュースミルヒの統治論を貫くコンセプトに符合することは明らかだ。[67]『神の秩序』新版でたびたび引用されるアンジュ・グダール（Ange Goudar, 1708-1791）もまた、農業に重きを置いたフィロゾーフのひとりだった。[68]

自然の法、自然の秩序にもとづく統治は、18 世紀半ばのヨーロッパにおいて有力になりつつある政治秩序の理論だった。従来の社団的に編成された国家を統治するための身分制的な秩序モデルや規範を克服する方法を人びとは手に入れた。それを可能にするのは理性の光であった。もはや国家の福祉、臣民の幸福は、かつてのように徳高き君主の賢慮に委ねられるのではない。国家にとって重要な情報、すなわち人口などを定量的に把握し、分析し、国家機械の運転を妨げる異常を見つけ、修繕あるいは改善してつねに最適な状態に保つことが統治の枢要とされた。そのために自然の観察と理解から得られる知識が応用され、統治の技術として実践される。

このような「計る統治」の構想に、ズュースミルヒは人口秩序の発見によって独自の貢献をなした。それはドイツの統治論において官房学が、自然の秩序にもとづいて人間の社会と政治体を治める「統治の科学」として体系化されたことに表れている。ズュースミルヒやユスティらの議論、とりわけ人口の統治は、官房学を古典的な重商主義と同一視する狭い枠組みでは捉えきれないものであり、18 世紀ヨーロッパにおけるポリティカル・エコノミーの形成という文脈で理解されなければならない。

おわりに

本稿ではヨハン・ペーター・ズュースミルヒの人口論とそこから導かれる統治論について、18 世紀半ばの官房学の展開、とくにユスティの議論を参照しながら考察を行った。従来とりわけわが国においては、人口学あるいは統計学の側面から言及・評価されることの多かったズュースミルヒだが、筆者は 1750 年代以降の著作を素材として彼の人口政策など統治に関する議論について検討した。それらが同時代の官房学やフランス政経論の議論と多くの関心、語彙、論理、目的を共有していたことを明らかにし、この時期のズュースミルヒの政治的議論への接近が彼自身の経験だけでなく、国内外の多くの哲学者、官房学者、啓蒙のフィロゾーフたちとの交流と、彼らの思想

と議論に満ちていた理性への信頼により促されたのだと述べた。またそれらの共通する特徴を有した統治の構想を「計る統治」として把握することを試みた。

自然の法則と秩序にもとづく賢明なる措置と配慮によって人びとに豊かさと安心、幸福をもたらす統治の理論はしかし、一方で実現の困難な机上の空論でもあった。啓蒙主義の政治思想についてR・ポーターはつぎのように指摘する。「高潔な人間をつくるのは、どのような国家か。経済活動を活発にし、あるいは、住民の健康に資するのは、どのような政策か。このように政治のプログラムはだんだん建設的になってゆくが、反面、願い事リスト、ないしユートピア的な夢想がいたずらに膨らむことにもなった」。[69)]

だが本稿で考察した18世紀半ばの統治論の重要な点は、臣民の幸福という目的や、そのために社会改革を主張したことにあるのではない。自然科学の知識を効率的な行政へと応用することを統治の理念と結びつけた点にある。A・ウェイクフィールドは、「官房学と行政の実践はどうつながるのか。官房学者の教科書をどれほど読んでも、解決するはずがない」[70)]と述べるが、18世紀末から19世紀にかけて、統計、土木、公衆衛生といった諸学の知識と技術は、行政の現場に根を下ろしていく。その移植を担ったのが官房学者自身でなかったとしても、彼らの教説はおおきく貢献しただろう。

知と統治の関連においてこの時代の政治、経済思想を考察することは、近代経済学の前身としてのみポリティカル・エコノミーを論じるよりも豊かな成果をもたらすに違いない。近年さかんな官房学研究の新潮流は、そうした動きを促すものと期待される。

［註］

1) ミシェル・フーコー（高桑和巳訳）『安全・領土・人口――コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度』筑摩書房、2007年、82頁以下。

2) 17世紀のイギリスで国力を計る技術、学知として「政治算術」が成立した。これについては、川北稔「政治算術の世界」『パブリック・ヒストリー』1、2004年、1-18頁。後述のようにズュースミルヒの人口論は、方法的に政治算術に依拠して

いる。

3) Süssmilch, Johann Peter, *Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, Tod, und Fortpflanzung desselben erwiesen*, Berlin 1741. 本書の初版には日本語訳がある。ズュースミルヒ（高野岩三郎、森戸辰男訳）『神の秩序』栗田出版会、1969 年（初版 1949 年）。以下、引用のさいは本訳書を「邦訳」と表記する。

4) トマス・リハ（原田哲史他訳）『ドイツ政治経済学――もうひとつの経済学の歴史――』ミネルヴァ書房、1992 年、17-18 頁。南亮三郎「ズュースミルヒの人口政策思想――マーカンティリズムを背景として――」『研究論集（駒沢大学商経学会）』15、1968 年、37-49 頁。

5) 重商主義の再検討に関する研究として、Stern, Philip J., Wennerlind, Carl (eds.), *Mercantilism Reimagined. Political Economy in Early Modern Britain and Its Empire*, Oxford 2013; Rössner, Philipp Robinson, *Freedom and Capitalism in Early Modern Europe. Mercantilism and the Making of the Modern Economic Mind*, Cham (Switzerland) 2020; Magnusson, Lars, *The Political Economy of Mercantilism*, London and New York 2015（ラース・マグヌソン（玉木俊明訳）『重商主義の経済学』知泉書館、2017 年）など。

6) 官房学を扱った古典的な文献として、Roscher, Wilhelm, Geschichte der National-Oekonomik in Deutschland, New York 1965［1874］; Small, Albion Woodbury, The Cameralists: the Pioneers of German Social Polity, New York 1969［1909］.

7) K・トライブは官房学を、大学という知的環境のなかで形成された科学的言説として分析している。Tribe, Keith, *Governing economy : the reformation of German economic discourse 1750-1840*, Cambridge 1988; Tribe, Keith, *Strategies of economic order : German economic discourse, 1750-1950*, Cambridge 1995（キース・トライブ（小林純他訳）『経済秩序のストラテジー――ドイツ経済思想史 1750-1950 ――』ミネルヴァ書房、1998 年）.

8) Nokkla, Ere, Miller, Nicholas B. (eds.), *Cameralism and the Enlightenment. Happiness, Governance and Reform in Transnational Perspective*, London and New York 2020; Seppel, Marten, Tribe, Keith (eds.), *Cameralism in Practice. State Administration and Economy in Early Modern Europe*, Woodbridge 2017; *History of Political Economy*, 53-3 (The Political Economies of Happiness: Cameralism, Capitalism, and the Making of the Modern Economic Mind), 2021.

9) Nipperdey, Justus, *Die Erfindung der Bevölkerungspolitik. Staat, politische Theorie und Population in der Frühen Neuzeit*, Göttingen 2012. ニッパーダイにはズュースミルヒの人口政策を扱った論考もある。Nipperdey, Justus, " Johann Peter Süssmilch: From Divine Law to Human Intervention", *Population*, 66 (3-4), pp. 611-636. ま

たM・フューアマンは婚姻政策に焦点を当て18-19世紀の人口論を分析する。Fuhrmann, Martin, *Volksvermehrung als Staatsaufgabe? Bevölkerungs- und Ehepolitik in der deutschen politischen und ökonomischen Theorie des 18. und 19. Jahrhunderts*, Paderborn 2002.

10) Behrisch, Lars, *Die Berechnung der Glückseligkeit. Statistik und Politik in Deutschland und Frankreich im späten Ancien Régime*, Ostfildern 2016.

11) ズュースミルヒの経歴については主に Elsner, Eckert, " Kurzer Überblick über das Leben und Wirken des Johann Peter Süssmilch (1707-1767) ", in Birg, Herwig (Hg.), *Ursprünge der Demographie in Deutschland. Leben und Werk Johann Peter Süßmilchs (1707-1767)*, Frankfurt a. M. 1986, S. 143-151.

12) Derham, William, *Physico-Theology or a Demonstration of the Being and Attributes of God from his Works and Creation*, London 1713. 本書の第10章では、人間を含む動物が数において一定の均衡のもとにあることについて論じられている。*Ibid*., pp. 168-179.

13) 学位論文のテーマは「物体の凝集力と引力について(De cohaesione et attraction corporum)」だった。Victor, Ulrich, " J. P. Süssmilchs Dissertation von 1731", in Birg (Hg.), *Ursprünge der Demographie*, S. 251-257.

14) Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, Vorrede, S. 40；邦訳著者序言15頁。

15) Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, Vorrede, S. 20-24；邦訳著者序言9-10頁。

16) Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 6f.；邦訳5頁。

17) これらの項目は今日の人口統計においても基本的な諸要素であり、本書はその範型を提供した重要な業績のひとつと評価される。それらはズュースミルヒが初めて推計したわけではないが、グラント、デラム、ストライクらがひとつの国や都市の資料にもとづいていたのに対し、ズュースミルヒはプロイセン王国全土のほかロンドン、ウィーン、ブレスラウ、パリなどの記録をもとにした比較分析から人口秩序を明らかにした。なお、出生時男女比について「常に1000人の出生女児にたいし1050人の男児の割合になる」との推計は、今日の統計にも合致する。Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 147；邦訳127頁。

18) Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 19f., 52ff.；邦訳15-16、43-50頁。

19) Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 107-110；邦訳93-96頁。

20) 出生時には男子の数のほうが多いのだが、年齢別の死亡者数を見ると早くとも成人するまで、表によっては60歳頃まで一貫して男子の死亡数が多いことが認められる。Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 222-235；邦訳190-202頁。両性の数がおおよそ均衡に至るのは30歳前後とされるが、男子が多く死ぬ要因としてズュースミルヒは重労働、戦争、飲酒等の不摂生を挙げる。Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 169-176；邦訳146-151頁。

21） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 42-52；邦訳34-42頁。

22） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 117-125；邦訳 101-108 頁。本書に掲げられた資料からは中東欧に対して西欧における婚姻当たり出生率が低いことが見て取れるが、その要因に晩婚・非婚があることは、歴史人口学の諸研究が明らかにしている。速水融編『歴史人口学と家族史』藤原書店、2003年所収の諸論文を参照。

23） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 242；邦訳208-209頁。

24） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 62f., 281ff.；邦訳52、240-244頁。

25） Nipperdey, "Johann Peter Süssmilch", p. 614.

26） 17世紀イングランドにおける実験哲学の形成については Shapin, Steven, Schaffer, Simon, *Leviathan and the air-pump: Hobbes, Boyle, and the experiment life*, with a new introduction by the authors, Princeton 2011（スティーヴン・シェイピン、サイモン・シャッファー（吉本秀之監訳）『リヴァイアサンと空気ポンプ――ホッブズ、ボイル、実験的生活』名古屋大学出版会、2016年）、また世界の数値化、定量化に関する一般的な記述として、ジョン・ヘンリー（東慎一郎訳）『十七世紀科学革命』岩波書店、2005年；セオドア・M・ポーター（藤垣裕子訳）『数値と客観性――科学と社会における信頼の獲得』みすず書房、2013年。

27） Graunt, John, *Natural and Political Observations Mentioned in a following Index and made upon the Bills of Mortality*, London 1662（グラント（久留間鮫造訳）『死亡表に関する自然的及政治的諸観察』栗田書店、1941年）; Petty, William, *Political Arithmetick*, London 1690（ペッティー（大内兵衛訳）『政治算術』栗田書店、1941年）. 川北「政治算術」（本稿註2）も参照。

28） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1741, S. 341-350；邦訳290-297頁。

29） Elsner, "Kurzer Überblick", S. 146.

30） Wilke, Jürgen（Hg.）, *Johann Peter Süßmilch*: *Die königliche Residenz Berlin und die Mark Brandenburg im 18. Jahrhundert : Schriften und Briefe*, Berlin 1994, S. 192-199.

31） Elsner, "Kurzer Überblick", S. 146.

32） Süssmilch, Johann Peter, *Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, dem Tode und der Fortpflanzung desselben erwiesen*, 2 Bde., Berlin 1761-1762. この改訂版の内容は、岡田実「ズュースミルヒの人口思想」『經濟學論纂』31（1・2）、1990年、59-70頁；同「ズュースミルヒの人口思想2」『經濟學論纂』31（5・6）、1990年、69-90頁でも概観できる。

33） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, Vorrede X-XI.

34） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, S. 396.

35） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, S. 416-418.

36） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1762, Bd. 2, S. 7ff.

37） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1762, Bd. 2, S. 28ff. 賦役の害については *ibid*., S. 35.

38）Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1762, Bd. 2, S. 46-53.

39）Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1762, Bd. 2, S. 61ff.

40）Nipperdey, "Johann Peter Süssmilch", p. 632.

41）Süssmilch, Johann Peter, "Abhandlung von dem schnellen Wachsthum der Königl. Residentz Berlin", in Wilke (Hg.), *Die königliche Residenz Berlin*, S. 15-48.

42）1712-1730 年には受洗者（≒出生者）が計 46,732 人に対して死亡者は計 46,034 人でわずかに死亡者が少ないが、1738-1750 年では受洗者 40,715 人と死亡者 43,773 人で明らかに死亡者超過となっている。なお、疫病が流行した年（1719, 1736, 1737, 1740 年）は別にしている。Süssmilch, "schnellen Wachsthum", S. 41f.

43）Süssmilch, "schnellen Wachsthum", S. 42-48.

44）Süssmilch, Johann Peter, *Gedancken von den epidemischen Kranckheiten und dem grösseren Sterben des 1757ten Jahres*, Berlin 1758. この文献は Birg (Hg.), *Ursprünge der Demographie*, S. 263-342 および Wilke (Hg.), *Die königliche Residenz Berlin*, S. 69-117 に再掲され、それぞれ注釈がつけられている。

45）Süssmilch, *Gedancken*, S. 10 ; Wilke (Hg.), *Die königliche Residenz Berlin*, S. 76.

46）Süssmilch, *Gedancken*, S. 49-56 ; Wilke (Hg.), *Die königliche Residenz Berlin*, S. 98-102.

47）Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, S. 521, Bd. 2, S. 62f. など。

48）ユスティの主著には、Justi, J. H. G. von, *Staatswirtschaft oder Systematischer Abhandlung aller Oeconomischen und Cameral-Wissenschaften, die zur Regierung eines Landes erfordert werden*, Wien 1755; Justi, J. H. G. von, *Grundsätze der Policeywissenschaft in einem vernünftigen, auf dem Endzweck der Policey gegründeten Zusammenhange und zum Gebrauch academischer Vorlesungen abgefasset*, Göttingen 1756; Justi, J. H. G. von, *Der Grundriß einer guten Regierung*, Frankfurt 1759; Justi, J. H. G. von, *Die Grundfeste zu der Macht und Glückseligkeit der Staaten*, 2 Bde., Königsberg 1760-1761 などがある。

49）Becher, Johann Joachim, *Politischer Discurs*, Frankfurt a. M. 1668, 2. Aufl. 1673; Dithmar, Justus Christoph, *Einleitung in die Oeconomische Policei- und Cameral-Wissenschaften*, Frankfurt a. d. O. 1731.

50）Justi, J. H. G. von, "Von dem grossen Einflusse der Ehegesetze in die Bevölkerung und in die Glückseeligkeit des Staats", *Göttingische Policey-Amts Nachrichten*, 3, 1757, S. 77-91.「国家の力と強さ、豊富な食糧、およそ大半の幸福は人口にもとづいているのだ。したがって人口が増えるように婚姻法を整えることが国家にとってとりわけ重要であることはたやすく理解できる」、ibid, S. 78.
なおこのときユスティはゲッティンゲンでポリツァイ局長を務めるかたわら、1737 年に創設されたゲッティンゲン大学で教鞭を取っていた。

51） Justi, “Einflusse der Ehegesetze”, S. 78ff.

52） Nipperdey, “Johann Peter Süssmilch”, p. 622f.

53） Justi, J. H. G. von, *Physicalische und Politische Betrachtungen über die Erzeugung des Menschen und Bevölkerung der Länder*, Smirna［i. e. Breslau］1769, S. 44, 118.

54） Justi, “ Einflusse der Ehegesetze”, S. 79. 啓蒙主義の「科学的」な知見が女性一般を従属的な「役割」へと押し込めていったことは今日よく知られている。

55） Justi, J. H. G. von, “ Von dem Nutzen der Todtenregister in denen Policeyanstalten”, *Göttingische Policey-Amts Nachrichten*, 2, 1756, S. 1-11. Vgl. Nipperdey, “ Johann Peter Süssmilch”, p. 626.

56） ズュースミルヒは『神の秩序』改訂版の序文で、このときの論争に言及している。Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, Vorrede VIII-X.

57） Nipperdey, “Johann Peter Süssmilch”, p. 626.

58） Justi, “Einflusse der Ehegesetze”, S. 77.

59） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, S. 139-143. ここに感じられる人口至上主義からの若干の距離は、ズュースミルヒは言及してはいないが、都市における死亡率の上昇と関連しているように思える。農村人口の増加が都市への人口流入と労働者の貧困の拡大につながるという懸念は、やがて現実のものとなる。

60） ユスティの「機械としての国家」に関しては、主につぎの文献を参照した。Stollberg-Rilinger, Barbara, *Der Staat als Maschine. Zur politischen Metaphorik des absoluten Fürstenstaats,* Berlin 1986; Nokkala, Ere Pertti, “ Triebfeder und Maschine in der politischen Theorie Johann Heinrich Gottlob von Justis（1717-1771）”, in Eggers, Michael, Rothe, Matthias（Hg.）, *Wissenschaftsgeschichte als Begriffsgeschichte: Terminologische Umbrüche im Entstehungsprozess der modernen Wissenschaften*, Bielefeld 2009, S. 157-174.

61） Justi, *Grundriß einer guten Regierung*, S. 320. この「道徳的身体 moralischer Körper」とは、成員の意思と力を統一した政治体のことを指している。Stollberg-Rilinger, *Staat als Maschine*, S. 106.

62） Justi, J. H. G. von, *Natur und Wesen der Staaten als Quelle aller Regierungswissenschaften und Gesetze*, Berlin/Stettin/Leipzig 1760, S. 302-308. Vgl. Stollberg-Rilinger, *Staat als Maschine*, S. 114f. 自然のふるまいや生命活動を機械的に捉える機械論哲学については、ヘンリー『十七世紀科学革命』、89頁以下。

63） Justi, *Natur und Wesen*, S. 57.

64） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1762, Bd. 2, S. 567.

65） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, S. 4-6.

66） Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1761, Bd. 1, S. 6.

67） 木崎喜代治『フランス政治経済学の生成』未来社、1976年。木崎によれば、ケネー

は自然法をまず物理的秩序として理解し、これにもとづく生産と経済の原理こそが、国家の道徳的秩序の規範、統治の準拠すべき原理だとした。前掲書、173頁。

68）グダールが1756年に匿名で出版した *Les Intérêts de la France mal entendus* という著作を、ズュースミルヒは何度も引用している。たとえば農業政策では、農政局のような専門部局を設置し、全国の農業を管理、指導させることを提唱する箇所を引用する。Süssmilch, *Göttliche Ordnung* 1762, Bd. 2, S. 41f.

69）ロイ・ポーター（見市雅俊訳）『啓蒙主義』岩波書店、2004年、44頁。

70）Wakefield, Andre, *The Disordered Police State. German Cameralism as Science and Practice*, Chicago 2009, p. 138.

（人文学研究科助教）

SUMMARY

Population Policy of J. P. Süssmilch and German Cameralism

Satoshi Shigaki

This article discusses German Cameralism and its political economy by focusing on the writings of Johann Peter Süssmilch (1707-1767), a Prussian theologian and pastor in Berlin. In his notable work *Die Göttliche Ordnung* in 1741, Süssmilch analyzed demographic phenomena such as the number of births and deaths, the sex proportion of births and the age distribution among death rates, showing little interest in political issues, and no attempts to apply his findings to political measures. However, in the second edition of *Göttliche Ordnung* in 1761, he mainly dealt with the population policy to be counted among the major Cameralists. How can we explain this shift?

Firstly, some experiences during his career, such as being a member of the Consistory, the Poor Commission and the Royal Prussian Academy of Sciences are likely to have drawn him closer to political and social matters. Indeed, in Süssmilchs treatises in 1750s on the rise of mortality in Berlin he argued that it was caused by the increase of the poor labourers in the rising textile industry and their deteriorating health standards. He proved how useful his demographic analysis for identifying factors of socio-political issues was. This led to improve the part on population politics in the new edition of *Göttliche Ordnung*.

Second, the evolvement of Süssmilch's population policy can be linked to contemporary political economy. J. H. G. von Justi, who systematized cameral sciences in 1760s, intervened in demographic events, having been stimulated by Süssmilch's population theory. Süssmilch himself was also driven to complete his own population politics by the works of German Cameralists and French writers. They were convinced that the possibility to govern population, controlling marriage, birth and death rates was supposed to be based on natural law. Such utopian visions of a well ordered and populous state opened the path leading to the practical use of natural sciences.